

福音を説くウィッチ[†]

— ウガンダ東部アドラの民族誌的研究 —

梅屋 潔*

The Gospel Sounds Like the Witches' Spell: Ethnographic Accounts of Jopadhola, Eastern Uganda

Kiyoshi UMEYA



皆さん、こんにちは。ご紹介いただいた梅屋潔と申します。今日は「福音を説くウィッチ」という演題で、私が長らく（1997-2015、継続中）フィールドワークをして調べているウガンダ共和国のアドラという民族のお話をさせていただきます。

問題の所在

本報告では、現役大臣の急死という、ウガンダ現代史においては有名な事例に基づいてその問題を検討します。その死の原因についてさまざまな解釈が流通するわけですが、そのうちもっとも一般的かつ常識的な解釈は、暴君であった大統領（当時）のイディ・アミン（Idi Amin

[†] 本稿は、平成27年12月19日に行なわれた講演をもとにした。

* 神戸大学大学院国際文化学研究科准教授／東北学院大学人間情報学研究所客員研究員
Kobe University / Tohoku Gakuin University

Dada Oumee c.1925-2003. 8.16) によって殺されたというものです。一方で当の犠牲者の出身地では、それとは大いに異なる説明が流通している。端的に言いますと、それは「死霊の祟り」であり、「呪い」だということです。その「死霊」や「呪い」による説明はいったいどんな説明なのかは、追って詳しく紹介します。アミンに殺された犠牲者は沢山いますし、その多くは理不尽にも十分な理由もなく殺されたとされています。当該の大臣もその数多い犠牲者のひとりである、という説明には非常に大きな説明力があります。また、のちに見るように、この大臣には殺される理由も十分にあったのです。十分な一般的説明がすでにあるように思われるのに、どうしてそれに加えて、独自のローカルな説明があらわれて、また一定の説明力を持つのであろうかというのが主な論点です。

登場人物とその時代

中心的な登場人物は、アルファクサド・チャールズ・コレ・オボス=オフンビ (Arphaxad Charles Kole Oboth-Ofumbi 1932.7.12-1977.2.17) という人物です。以下、ACKと略します。

プロテスタントの名門、キングズ・コレッジ、ブドを卒業しまして、東アフリカで一番の名門校、マケレレ・カレッジで神学を学びたいという志望を持っていましたが、お父さんが亡くなりまして学業を断念したといわれています。親戚のオチョラ（後出）という人物が長を務めていたブケディ協同組合という半官半民の企業に最初の就職をしました。その後、地方行政に転じ、県に勤めていた時の上司官僚の助力を得て、自分たちの出身民族であるアドラの最初の民族誌を書いたことでも有名です。

その後、地方行政職から中央官庁へ出世して

いきます。まず1960年に資格を取り、アチヨリ県とランゴ県の副弁務官の職に就きます。それから、アチヨリ県の弁務官になります。弁務官というのは、日本での県知事に似ていますが、選挙ではなく中央から選ばれて任命され、派遣される点が違います。

その後、1962年、ウガンダ独立時の首相であるアポロ・ミルトン・オボテ (Apolo Milton Obote : 1924.12.28-2005.10.10) に見込まれ、総理大臣室秘書官になりまして、後には書記官長の要職に就くことになります。オボテ政権での最後の職階は国防省次官であるといわれています。

“ゴールド・スキャンダル”あるいは“66年危機”というウガンダを揺るがした大事件があります。1964年頃からコンゴ内戦が激化していましたが、首相モイーズ・チョンベ (Moise Kapenda Tsombe 1919-1969) が西側の傀儡だと考えたウガンダのオボテ首相はこっそり反政府軍をサポートしていました。折しも米ソ冷戦が激しかったところで、アフリカが社会主義になるのか、自由主義陣営につくのか、西側も東側も熱心に介入していた時代の話です。コンゴの反政府軍を密かにサポートしていたウガンダ国軍のキーマンが、当時大佐だったアミンです。告発したのは、ダウデイ・オチェン (Daudi Ocheng 1925-1967) というカバカ・イエッカ (KY: *Kabaka Yekka*) 党の書記長でした。オチェンは入手したアミン大佐の銀行の残高通知や振込通知を証拠として国会に提出し、アミン大佐がコンゴ東部から、金と象牙、コーヒーを密輸入して首相を含む4人でお金を分け合っているという疑いを告発しました。

その告発の時に、オボテは国内にいなかったのですが、帰ってきてすぐ66年の2月22日に5

人の閣僚を閣議の席で逮捕して裁判を行わずに投獄してしまいます。2月26日にはアミンを大佐から軍司令官に任命しました。3月3日には、大統領を解任して、憲法を停止します。そして4月15日には、アミンに率いられた軍に包囲された国会で、野党議員全員が抗議して退席したあと、暫定憲法を強行採決、自らが大統領に就任しました。暫定憲法は、議会の権限が抑制され、大統領に極端に権力が集中しているものでした。5月24日には、それまで大統領だったウガンダ国王のカバカ (*kabaka*=王) ムテサ二世 (Major General Sir Edward Frederick William David Walugembe Mutebi Luwangula Mutesa II KBE 1924.11.19-1969.11.21) の宮殿をアミン率いる国軍が攻撃しました。カバカはかろうじて助かりましたが亡命を余儀なくされました。

オボテ政権は次第に左に傾いていきます。隣国のタンザニアの大統領ニエレレ (Julius Kambarage Nyerere 1922.3-1999.10.14) 同様、社会主義化していきます。それを自ら“左への動き”といいます。そうなりますと、西側諸国は警戒して、オボテ降ろしを企て、反対勢力を支援するようになります。おそらくは、西側も裏で糸を引いていたと思われませんが、オボテが英連邦会議でシンガポールに出張中に、アミン将軍が国軍を率いてクーデターを起こし、政権を奪取しました。それが1971年の1月25日のことです。

クーデター直後は、軍事政権は暫定的であって、やがては文民政治に移行すると言っていました。西側はアミンならば傀儡にできるとある意味で有望視していたのですけれども、アミンはイスラム教徒ですので、リビアのカダフィなどのイスラム系中東諸国との関係を次第に強化

して西側の国際社会からは孤立していきます。

もともとオボテ時代の憲法で大統領に権限が集中していますので独裁政権となって暴走し、著名人を含む一般人を裁判なしで多数処刑、あるいは秘密裏に殺害したといわれ、「アフリカのヒトラー」と呼ばれるようになります。犠牲者はアムネスティ・インターナショナルの試算では、30万人とも40万人ともいわれています。別に戦争をしていたわけでもなく、普通の人たちがどんどん消えていき30万人というのは本当に信じられない数字です。

アミンは、クーデター前に、国防省次官だったACKと一緒に仕事をするが多かったようです。アミン政権が成立したあとは、ACKははじめに国防担当大臣 (1971)、続いて国防大臣 (1971-1973) に任命され、のちに財務大臣 (1974-1976)、内務大臣兼任 (1974-1977)、最後は内務大臣でした。大統領が外遊時には、大統領代行 (1972) も務めていました。この経歴からわかりますように、非常に信頼されていた腹心だったのです (写真1)。ところが、1977年2月16日に内務大臣のまま亡くなることになります。

アミンの民族的バックグラウンドは複雑です。民族的にはカクワ人の父とルグバラ人の母を持つといわれていて、ウガンダではヌビ (Nubian) と呼ばれる人々です。ヌビは、南スーダン出身のイスラム教徒という含意で、普通の民族の境界を越えたイスラム教にもとづいたネットワークをその特徴にしています。アミン自身もイスラム教徒として熱心に宗教活動を進めていて、他宗教を弾圧しました。それから一方で、重要な予備知識としてオボテと民族的に系統が同じ、アチョリとかランギを軍の中で弾圧して、虐殺もしたといわれています。

政権発足時こそ閣僚の中での宗教的なバランスがとれていましたが、イスラム教徒の率が増え、77年8月には、21人いる閣僚のうち14人がイスラム教徒という状態になりました。それから他宗教の弾圧ということであれば、カトリック教の式典にアラブ人の服装でわざわざ参列したり、キリスト教の教会建立100年記念の行事で募金を行っていた教会に対し、「金儲けをするな」と批判したり、クリスマスのラジオ放送を妨害するなど嫌がらせをしていました。

一方で、宗教的なものだけではなく、政敵を抹殺していくために秘密警察「国家諜報局」(SRB: State Research Bureau)を作り、72年の9月には著名人でも身の安全は保障できないと、閣僚に警告するまでになりました。亡くなったとされている人のなかには、元首相で最高裁長官のベネディクト・キワヌカ(Benedicto Kagimu Mugumba Kiwanuka 1922.5.8-1972.9.22)やフランク・カリムゾ(Francis Kalemera Kalimuzo 1925-c.1973)マケレレ大学学長、財務大臣、ウガンダ銀行総裁などがいます。

外交もだんだん孤立していきます。まずロシアと国交断絶(1975.11.)、続いてザイル(1975.12)、連合国イギリス(1976.7)とも国交断絶していきます。英字新聞4紙を廃し(1973.11)、海外の新聞雑誌を禁止(1974.6)しました。オボテはその間、タンザニアで思想をともにするニエレレ大統領の支援を受けながら、機会をうかがっていて、何度も暗殺計画を立てていたようですけれども、いずれも失敗に終わっていました。

大主教殺害事件

ACKの死につながった事件の前日、“カンガルー・トライアル”と名付けられている軍事裁

判が行われました。ナイル・マンションというアミンの執務室がある建物(現在はウガンダの高級ホテル)で、(おそらくはでっち上げの)告発がなされました。オボテから送られてきた兵器をジャナニ・ルウム大主教(Janani Jakaliya Luwum 1922-1977)が受け取ったというのが告発の主旨でした。その次の日、前日の裁判のあとに連行中、自動車事故によりルウムと鉱物水資源大臣オリエマ(Erinayo Wilson Oryema 1917-1977)、内務大臣であるACKが死んだ、と発表されました。自動車事故というのが、政府スポークスマンの公式見解です。事件の報道は2月17日の「Voice of Uganda」という政府系の新聞の第一面に出ました。「オボテの計画は明るみに／人民を殺害しようとしていた手下たち」というような記事です。事故車の写真も公開されていますが、これも疑義が多いもので、ぶつかった2台のうち1台は「セリカUVS 299」のナンバーからわかる国家諜報局の車であり(UVSナンバーは国家諜報局に配当されていた)、もう1台はレンジローバーでアミンが数週間前から得意げに乗り回していた車でした。

アミンは、なぜこんな事件を起こしたか、なぜ3人を殺さなければいけなかったのか、いくつかの分析があります。当時閣僚でもあったヘンリー・チェンバ(Henry Kyemba 1939-)によれば、背後には、“サンダーボルト作戦”(別名“エンテベ空港事件”)の影響があったのだということです。「この事件で地に墮ちた権威を取り戻そうと焦ったアミンが目障りな奴は抹殺してしまおうと思ったのだ」というのが、チェンバの分析です。

この事件は、パレスチナ解放人民戦線ゲリラにエールフランス139便がアテネ空港離陸直後にハイジャックされた事件でした。ウガンダの

エンテベ空港に着陸したテロリストは、イスラエル人乗客を人質にとって、服役中のテロリスト40名の釈放を要求しました（このリストの中には、日本赤軍のメンバーも1名入っていたようです）。イスラエル空軍が7月3日から4日にかけて、エンテベ空港を急襲し、人質を奪還します。誤射で死んだ3名と病院に搬送された1名を除く、乗客全員が解放されました。（イスラエル空軍側ではただ一人殉職したヨナタン・ネタニヤフ יונָתָן נֶטַנְיָהוּ "יוֹנָתָן נֶטַנְיָהוּ", Yonatan Netanyahu 1946.3.13-1976.7.4)が、イスラエルでは国民的英雄になっているそうです。今のイスラエル大統領の弟さんです。）

チェンバは上のような事件の原因分析に加えて、より個別的にACKが死んだ理由を分析しています。60年代の“ゴールド・スキャンダル”の内情も、国防省次官として熟知していたし、国防大臣、内務大臣、財務大臣も歴任していたので、「アミンが関わったいずれの事件においても責任者だった」。つまり「知りすぎた男であって、生かしておくほどは信頼されていなかった」というのが、チェンバの分析です。それともう一つは、73年にACKは内閣から外されたことがありますが、その間の降格人事について不満を持っていたこともあげています。降格人事は事実ですし、それについて不満を漏らしていたことについては私も別のところから聞いています。

殺害の動機のもう一つの説は、サウジアラビアから送られてきたモスク建造用の資金をアミンが使い込んでしまったという説です。この説によると、ちょうど教会建立から100周年を記念して、イギリスからジャナニ・ルウム大主教に送られてきている資金を流用したいと考えたアミンが、ルウムに流用を持ちかけます。最初

に仲介に用いたのがオリエマで、次にACKが使いに立ちましたが実現しなかったため、面倒だから殺してしまったということです。

一方でオボテの手先としてアミン殺害を企てたこともあるオーネン (P.M.O. Onen 1932-) は、その自伝のなかで、アミンに忠誠を誓っていたACKがここで殺されたのは意外だと言っています (Onen 2000)。このように議論が分かるところではあるのですが、彼らの側に立って見ると、思い当たる節はたくさんあります。ルウム、オリエマもそうなのですが、オボテと同じナイル系民族でしかも熱心なプロテスタント信者であるという共通点があります。72年には、ACKの親戚でのちに触れるアドラ出身の国務大臣第一号、オボテ政権の大臣だったのですが、ジェームズ・オチョラ (James Silas Malilo Ondo Ochoa 1924- c1972) が行方不明になっています。それからアドラでも軍属のものは数多くの人がアチョリ、ランギの虐殺を間近に感じているわけで、はた目から同じ系統の民族で区別がつかないため、危機感是十分感じていたと思います。

出身地を訪ねて

私が調査しているのは、ACKの出身地であるパドラ郡（今は西ブダマ郡）です。ニヤマロゴ (Nyamalogo) というのが彼の村で、コロブデイ (Korobudi) というのが彼のお父さんのお墓がある村です。

ACKの邸宅を訪ねていくと、非常に驚かされるのは、サバンナの真ん中に巨大な十字架がそびえているのです。周りには、キャッサバとかコーヒーとかサトウキビの畑が広がっているのに、巨大な十字架があって電飾まである。他の家族のお墓も大理石で、ちょっと場違いな感

じです。3mほどの巨大な十字架です（写真2）。

邸宅も数キロメートル離れたところのニヤマロゴという丘の上にあるのですが、巨大な給水タンク、2階建てのレンガ造りの豪邸で、隣にはレンガ造りのチャペルまであるわけです。このあたりは、すべてACKの地所であるといわれていて、じつに5,000エーカーあるそうです。その外部には草ぶきの屋根が並んでいるわけですから、非常に対照的な景色になります。

電線が通っているのがわかると思いますが、最寄りの町であるトロロ市街地の変電所から、20数キロほどをここに向かって一直線に電線が引かれています。敷地内にはヘリコプターとか小型飛行機が離着陸可能な滑走路がありますし、ガソリン・スタンドもありますし、ガレージもついているという、現在はその設備のほとんどは壊れていますが、ちょっとびっくりするような近代設備が整った家だったわけです。

最近ではミュージック・ビデオのロケ地になりました。「死は差別しない」というその歌の歌詞の中にも、「最初の政府を作ったオボテにも死は告げられた」とか、「誰もが恐れたアミンにも死は告げられた」など政治家の名前が歌いこまれます。この歌では、「ラッキー・デューベ」、「ボブ・マーリィ」、というミュージシャンに続いて、「富に沈溺したACKにも死は告げられた」と歌われています。「富に沈溺した」者としてACKの名前が歌詞に出てきます。

最初に訪れようとしたときに、私が住みついていたグワラグワラの村の人たちには、決して行ってはいけないと止められました。ろくな死に方はしないからと。死ぬのを前提で話すのです。聞くと、あの屋敷には連続して変死した人が3人もいるし、一人はヘビに咬まれて死んだのだということでした。連続死は事実なようで、

実際にACKの叔父さんが立て続けに死んだそうです。それから屋敷の門の前でヘビに咬まれて死んだ人がいたのも事実だということです。しかし、ACKの屋敷とは関係ないというのは後でACKの息子さんとのインタビューでわかりました。

オクムの死霊（ティポ*tipo*）

ACKの死について、一般的解釈と違う解釈とは何かと聞いてみると、地元では、ACKもそのお父さんもオクムという人の死霊、ティポ（*tipo*）と現地語では言いますが、ティポによって死んだのだといわれています。もう一つの説は、ACKの死は、ロリ・クランの長老によるラム（*lam*）、つまり呪詛によるものだというものです。もう一つは、親戚で最初に国務大臣になったオチョラによるティポ、死霊によるものだ、という説です。

このことについて、詳しく説明していきます。現地語がいくつか出てきますのでまとめておきます。ティポというのは、死霊ですが、殺された人の死霊のことです。チェン（*chien*）というのは崇りのことですが、人に危害を及ぼすことです。ラムというのは、年長者が自分を尊敬しない年少者を懲らしめるために、正当的に使う呪術のことです。ジャジュオキ（*jajwok*）というのは、ウィッチのことですが、反社会的な邪術を行う人とか、毒殺などを企てる人とか、夜、外に出て踊ってしまう人（ナイト・ダンサーとウガンダではいうが、ナイト・ランナーのほうがアフリカ各地では一般的）とかの意味があります。ジャシエシ（*jathieth*）というのは、預言者であり、伝統的呪術師であり、自分も霊に憑依されて、霊界と交渉できる人のことをいいます。イキロキ（*yikiroki*）というのは埋葬

儀礼のことで、遺体を埋めるということを儀礼の中心とした葬儀の第一段階です。ルンベ (*lumbe*) は、最終葬送儀礼で葬儀の最終段階で、死者のことを忘れるための葬送儀礼です。オケロ (*okelo*) というのは、生前業績が顕著だった死者を顕彰するための死者顕彰儀礼のことです。クヌ (*kunu*) というのは、ある特定のクランが、祖先祭祀とか、神霊祭祀のために供養する場所のことです。クウォル (*kwor*) 関係というのは、殺人などを契機に発生する敵対関係のことで、一般には何年もかけて賠償とか和解が完了して、カヨ・チョコ (*kayo choko*)、つまり“骨かじり”という儀礼を行なわないと解消しません。このクウォル関係にあるものたちは口をきいてはいけなく、近くで会ってはいけなく、同じ小屋に入ってはいけなく、一緒に食事をしたり、お酒を飲んだりしてはいけなくというものです。

さて、オクムのティポというのはどのような話かと言いますと、ACKのお父さんであるセム・K・オフンビ (写真3) という人が、飢饉のときに、教会の畑でキャッサバを盗んでいたオクムという人を殺したという出来事が骨子となっています。44年の飢饉のさなかのことで、教会が管理しているキャッサバの畑を見回っている時に、キャッサバを畑から掘り出して、ずた袋に詰めているオクムを見つけてしまった彼は、オクムをその場で殺害したといわれています。誰かを殺害すると、その人の死霊、ティポは家までずっとついてくる、殺害者が最初に会った人、最初に入った小屋、遺体を最初に発見した人、それらの人々がみんなティポに憑きまといわれるといわれています。このティポは、恐ろしく強力で、いかなるジャシエシ、宗教者の浄化儀礼も効き目がないといわれ、ひとたび、

これに憑りつかれたら、世代を超えてその被害が続くとされています。

ACKのお父さんであるセム・K・オフンビは42歳にして教会を迫られて、4年後に病死しました。お腹が膨れ上がって死んだといわれていますが、これは異常な死の典型で、普通は毒殺が疑われるところです。当初は、ティポよけに薬を袋に入れて腰に下げていたのですが、キリスト教に深く帰依するようになって、それをやめたためと噂では言われています。この場合にはキリスト教に熱心になったことが、むしろ不幸死に直結したという語りになっています。オクムという名前にも含意がありまして、生理が止まらないままに生まれた子どもがオクムと名前が付けられます。アフリカ各地で特別視される双子ほどではないにせよ異常出産として特別視され、神秘的な力を持つ可能性があると考えられています。77年にACKが死んだときに、唯一、遺体を調べたといわれている男の名前が、たまたまオクムだったということがあとでわかりました。同じ名前アドラ人は多いので、われわれにとっては偶然の一致にすぎないように思われますが、過去の事件を知っていて神秘的な力を信じている人にとっては、やはりオクムのティポの仕業だったのだという証明のように見えるわけです。

ふつうは、このような殺人によって被害者と加害者の集団はクウォル関係に入ります。クウォル関係になった場合は、口をきいたり、飲食したりということはしないはずなのです。それが解消されるのは、賠償などがすべて済んで、“骨かじり”の儀礼を行なってからの話ですが、オクムの出身クランであるラモギと“骨かじり”儀礼が終わっていないのに、セム・K・オフンビはラモギ・クランの人から第二夫人を娶った

といわれています。これは、ジャジュオキ、つまりウィッチであり、秩序を守らないものであると、当然、「有刺鉄線」の外側の論理では言われるわけです。しかし、キリスト教徒を自認する彼らに“骨かじり”の儀礼を行なうという選択肢はありません。その意味では、キリスト教徒であるということに呪縛されてしまっています。セム・K・オフンビがどこに埋められたかがまた問題になります。

セム・K・オフンビのチェン (*chien*)

アドラの人は最初の妻を娶るときに、お父さんが土地をあげて、水で祝福されたその場所に小屋を建てることになっており、やがてはそこに埋められることになっています。当然ですが、教会勤務のセム・K・オフンビは教会近隣の土地と小屋を借りて住んでいたため、該当する場所がありません。理念的に埋葬すべき場所に埋葬することができませんでした。(のちにACKが小屋のあった場所の土地を買いたいといって交渉に行きましたが、拒絶されました。)適切な場所に埋葬されていないことは、チェン、つまり祟りの原因になるわけです。結局、埋葬されることになった土地は、父の土地だという説と、母方のものだという説がありますが、いずれにしても、埋葬に適切な場所ではなかったという意見では衆目は一致しています。しかも大執事であったアサナシオ・マリंगा (Asanasio Malinga) が、埋葬儀礼の執行を拒否しました。拒否の理由は当然で、教会の教えに背いて、第二夫人を娶ったこと、それから殺人を犯したことなどの理由でした。数名の有志、生前の友人が埋葬儀礼を執行しました。生前の友人とは、教会で働いていたときの仲間であった、ミカ・オマラとかサウロ・オカドなどです。

しかしながら、適切な場所に埋められていないという思いがありますので、絶えず再埋葬しなければならないという噂が立ちます。いっぽう「有刺鉄線」の内側のACKたちは、ちょっと異なった論理なのかもしれませんが、実際に度重なる墓の建て替えを行いました。60年後半、秘書官長だったときに建て替えていますし、71年の非常に羽振りの良かった時期と76年、死の前年にも建て替えています。自宅の隣にあるチャペルで、ACKのお父さん、セム・K・オフンビの肖像がステンドグラスになっています(写真4)。別に聖人でもなんでもなく、普通の信徒奉事師 (lay reader) で教会でのポジションとしてはあまり高くないけれど、自分のお父さんということでACKが無理に作ったチャペルです。チャペルのタイルが剥がしてあるところは、アミンが置いた礎石がある部分です。チャペル建造前のルンベとかオケロという葬送儀礼の時に、ACKのお父さんのお墓の前にみんなで集まっている様子の写真が残っています。今でも葬儀などには、車を持っている人は車でいくのが礼儀ですが、現存する写真にも沢山の車が並んでいる様子が写っています。墓の回りを軍隊が取り囲んでいる写真や、大統領になったばかりのアミンを乗せた小型のヘリコプターが自宅の庭に着陸する写真などが現在もACKの邸宅に遺品として残っています(写真5、写真6、写真7)。

チャペルの建造の目的は非常に微妙なものです。「有刺鉄線」の内部の論理も、セム・K・オフンビの名誉回復と顕彰だとするならば、それもキリスト教的ではないような気がします。チャペルの中にACK夫妻の夭折した子どもの慰霊碑があり、身近な例でいえば「水子供養」の論理にも通ずるもののような気がします。チ

チャペルの造りはキリスト教的ですが、発想自体はキリスト教的なのか、やや疑いが残るところです。

おそらくは行われた儀礼の構成としては、現代の葬式がそうであるようにニャパドラ (*nyapadhola*)、つまりアドラ流なものキリスト教的なものとの折衷であろうと思われます。現代でも、葬列には参列者が多い方がいいわけですが、数百人の軍人を従えて、大統領がヘリコプターで参列するような非常に大規模なものであったことがうかがわれます。

そういったものを「有刺鉄線」の外側で見ていた人の解釈がどのようなものであったかということが重要です。

墓の建て直しは不幸への対処

墓の修繕とか改築は、生きている人の病気や不幸の原因を占ってもらい、死者が墓の状態に不満をもっているとの卦が出て、その結果行われることが多いのです。つまり、病気や不幸の原因は死者のチェンだというわけです。だから第三者から見ると、基本的には、墓の建て替えは、チェンに対する対策と受けとられます。実際にオフンビ家にも叔父が連続死しているということがあります。建て替えを3回も行っているのは、そのたびにきっかけになる不幸が起こったということが外部者には想像されます。「有刺鉄線」の内側でいくらキリスト教への強い信仰心を訴えたところで、「有刺鉄線」の外側ではキリスト教という外来の力を用いたティポという死霊の力への対抗呪術、あるいは、祖先のチェンに対する慰撫儀礼とみなされました。たびたび建て替えられたお墓とそこに隣接されたチャペルや十字架は、他を圧倒する存在感があるだけに、異常性、個別性が視覚に訴え

かけるものになっています。セム・K・オフンビは、生前には、教会およびその付属学校で働いていましたが、職位はそれほど高くはなく、定年を待たずに教会を追われている人です。聖人ならともかく財産を残さず死んでいる一個人のために、建てられた経費はどこからか出てくるのか。塀の外側から推測すると、出てくるのはガバメンティ (*gavamanti*)、政府というよくわからないものから出ていて、同時期に近隣に誘致された兵舎と出所が同じということで、換喩的に軍への恐れがオフンビ家への恐れにも直結したようです。基本的にウガンダでは自宅の隣にチャペルを作るということはありませんでした。逆に、自ら住んでいる小屋に呪術的な仕掛けを施すことはニャパドラ (=アドラの流儀) では一般的でしたから、隠喩的にチャペルが呪術的な施設だという推論が説得力をもつのです。

まとめますと、「有刺鉄線」の外側の人々の推論は、聖人でもないのに、チャペルを建てるのはあまりないことではないか、と言うところからはじまって、その建て替えの契機や目的が、次々にアドラ流に読みかえられていきます。キリスト教へのこの家族の信心はティポの力を恐れてのもの、あるいは慰霊だと考えている。「キリスト教」という新しい「宗教」を認識するときに、そういったバイアスがかかってくる。ティポの力をキリスト教の力で防ごうということだとすれば、結局やっていることは、ジャシエシと変わらないし、自分の財産とか利益のためにそういう能力を用いるとすればジャジュオキ、ウィッチにはかならないのだというのが、「有刺鉄線」の外での解釈です。

ロリ・クランとの土地問題とサウロ・オカド

もう一つ、問題があります。それは、このお墓が建っているコロブディの土地問題です。このコロブディ＝ニヤマロゴ間の土地はACKが60年代の終わりから70年代にかけて購入したといわれています。現在は5,000エーカーの広大な地所の一部です。購入したのは、事実だろうと私は思っていますが、強制的に立ち退かせたという話が「有刺鉄線」の外では非常に強く言われます。サウロ・オカドという人はコロブディからムランダまでの約3kmを、足が不自由だったため、膝で歩いて逃げたと伝えられていますし、あるいは背中を殴られて病院に搬送され一命をとりとめた人もいるそうです。その人たちの多くはロリ・クラン、邪術の得意な人たちだったから、邪術をかけられたのかもしれないといわれます。それだけではなく、サウロ・オカドは、セム・K・オフンビの親友で、大執事マリंगाに拒否された埋葬を執行した数名のうちの一人です。父の恩人だった人に対して、そのような仕打ちをしたというのは、仁義にもとる、ということで、そんな非常なうちをするACKはジャジュオキだと皆が口をそろえていうわけです。

要するに、見慣れないあるいは新しいキリスト教的なもの、土地ごと買い上げられて、「有刺鉄線」を張り巡らされて、外側から伺い知れることは、すべてティポへの対抗呪術とみなされるような要素がはからずしてあったということです。皮肉なことに最初の頃にACKは、アドラの自分の民族について本を書いたことを紹介しましたが、彼の著書に次のような記述があります。「ロリ・クランの人々はもともとニヤマロゴに住んでいて、のちにコロブディに居住地を拡大した。コロブディには彼らが供犠を

行うオヤリングマ・ロックがある。」いわゆる聖地のようなものがあるわけです。そこを購入してしまったというのであれば、いろんな呪いとか祟りが伺われても不思議はないわけです。

ところが、ニレンジャ・クランとロリ・クランとの確執というのは、非常に長い歴史があるという説もあります。これも無視できないので紹介しておきます。もともとロリ・クランの人間とは一緒に食事をしないということになっているし、「ロリ・クランの病人をわれわれニレンジャのオボ＝コレの子孫が訪問したら、即死するだろう」といわれています。こういったクウォル関係がもし、長い歴史を持っていたとすれば、ロリ・クランに属するサウロ・オカドを代表する人たちと親しくしていたセム・K・オフンビが、クウォル関係をないがしろにして、タブー侵犯していた恐れもあるということになります。そうしますと、キリスト教の文脈で色々と言いつはしていたかもしれませんが、もともとやってはいけないことをやっていたわけで、父の代からすでに、いろんな意味で祟りを想像できるような状況が整ってしまっていたのかもしれない。そうでなくても、もし土地を買った後に、人を追い出したというのが、クウォルの発生源だとすれば、父の世代に親しくしていた友人を裏切る行為であって、しかもクヌ、聖地をはく奪するような問題でもあるから、呪詛とか祟りとか招きうるような状況になってしまう。ACKの一族とコロブディ近辺に拠点を置いているロリ・クランとの関係というのは現在でも、色々な呪詛とか祟りとか想定できるような関係にあるわけです。

地域社会からの孤立

もう一つ、セキュリティ問題が議論の俎上に

上ります。ACKの奥さんは、隣の民族のニョレという人から嫁入りしたのですが、アドラ語もしゃべれませんし、敷地内に無遠慮に入るアドラ人を非常に恐れていました。重ねて、度外れた財産を守るのが大変だったそうで近代的な銃器を備えたアスカリ、膨大な警備員がいました。国防大臣のときは当然ですが、広大な敷地の中に武装した兵士があふれていました。これは外から見ても非常に異様な光景でもあり、「有刺鉄線」の外側からは、いろいろな想像力を働かせてしまうことになります。ニャパドラには、盗みを回避する呪術もあったこともあって、機能面の同一性からアドラの人びとは隠喩的に「呪術」を連想させられたようです。

もう一つ、特徴的なことがあります。ACKは家族を非常に大事にするのですが、これが異常ととられた可能性があります。町の自邸の扉に自分と奥さんの頭文字を書いた金文字のレリーフがはめ込まれている。一方で家族の内部と外部の線引きは厳しいものでした。お父さんのセム・K・オブンビは孤児を引き取って育てるなどしていましたが、それとも違っていました。奥さんが乗った飛行機が到着予定だと電報が届くと「Thanks for the almighty God.」というメモを書いてそれを保存するぐらいです。一方ではすごく外部の人にはケチで厳しく当たっていたようです。ある人は、親戚である自分には親切にしてくれたが、と前置きして、次のようなエピソードを紹介してくれました。敷地を案内してくれたとき、男たちが集まってシロアリを集めているのを見つけた。すごい剣幕で怒鳴りつけて、「ここは私の土地なのだから、そのシロアリは俺のものだ。まず出て行ってもらおう。それから、捕まえたシロアリは残らず置いていけ。」別にそのシロアリを自分で食べるわけで

はないのですね。それを見て驚いたという証言があります。

ACKが生きている時に「トマトの体」という歌が流行ったそうです。「隣人に鶏を絞めて、分け与えるような人だったら、あなたが死んでも悼んであげるけれど、トマトは（自分が）満足するまで食べるし、満足するまで飲むので腐るのも早いのだ」という呪詛歌です。彼の目覚ましい出世についても、その背後にジャシエシの呪術的な力の助けがあったという噂もありました。ジャシエシの力を借りて政府での地位が上昇し、それにしがたって、地域住民との関係は悪化したとされています。彼が死んだときにみんなハッピーだったのだと、現在、地位も名誉もある長老たちが口をそろえて言っていました。

もう一人のティボ オチョラ

流行歌がもう一つありまして、アミンとACK、オチョラすべてが歌いこまれている歌があります。アミンとACKはどういう歌詞で歌われているかという「兵舎を誘致した、盗賊を連れてきた、この地域はだめになった」といったネガティブな歌詞で歌われています。一方、オチョラはどういうふうに歌われているかという「病院を建ててくれた、この地域を発展させた、診療所を建ててくれた」と歌われ、ACKは「土地を奪った、本を書いてくれた」と歌われています。歌に出てくる国務大臣経験者、オチョラがもう一人のティボ、死霊でもあります。ACKとともにニイレンジャ・クランに属していて、先んじて出世した人です。ACKの最初の就職は、オチョラの世話であり、オボテ政権での出世もオチョラが先行していたことが大きかったのではないかと思います。つ

まり、ACKがオボテに気に入られて、総理大臣室に抜擢されたとき、オチョラはオボテ大統領の閣僚だったわけです。オチョラが消えてしまったのは、72年の9月の日曜日のことでした。実はこの日、ACKはアミンを招待する予定だったのを取りやめていたことが日記からわかっています。オチョラは郵便局に郵便を取りに行ったまま消えてしまいました。色々な事が言われていますが、オチョラは大臣時代にソビエトとの強いパイプをもっていたといいます。軍事の研究もソ連の協力を得てしていました。21日にオチョラの盟友でもある最高裁判事であったベネディクト・キワヌカが逮捕されてそのまま消えたという事件がありましたので、関連付けて考えられるわけです。妹さんに話を聞くことができましたが、「私たちはACKを叔父さまというふうに呼んでいた。兄がいなくなってすぐに、叔父さまから電話がありました。身柄が確保されていることは自分も把握している。と言っていた。」ということです。先ほども紹介しました秘密警察の暗躍は、76年ぐらいからとされていますので、この72年の段階では軍のものだろうといわれています。軍の最高責任者は当時ACKだったので、これは責任はどうしても問われます。しかしその後ACKはとぼけるわけですね。

常にオチョラとACKは対比して語られますが、すべて選挙で支持を得て出世していくオチョラに対して、ACKは選挙に出たことがなく、支持されたこともありません。「資格」と「大統領任命」という二つのマジック（呪術）でどんどん出世していく、そういうものは不透明で地元の人から見ると、すべてが、ジャシエシの呪術のおかげであると考えられていました。

オチョラは地域のために私財をなげうったと

評価されていて、自分の住んでいた村には小さな小屋しかないといわれています。一方でACKは兵舎を作るための建材や費用を流用して、大きな邸宅を作りお父さんの墓も巨大なものにしたと噂を立てられています。礼拝堂もチャペルも兵舎建造のお金や建材の流用だろうといわれています。電線についてもオチョラの作った診療所の近くを素通りしているそうです。ほんの少し5m延長して電気を通してくれるよう、住民は懇願したとされています。「それが可能で、あなたはその力をお持ちなのですから」と、いう住民の懇願に対しても「答はノーだ」と、「私の家まで一直線に引くのだ」と言ったと伝えられています。これは非常に印象的な出来事だったようで立場や住む地域の違う人たちから、異口同音に語られました。オチョラの村の屋敷というのは、当時としては別に小さいとは言えないと思います。だけれども、ACKの度外れた二階建ての家に比べると地味です。

比較してみますと、富やキャラクターの可視性に差があることは事実で、このことはある程度現地でも認識されています。オチョラはトロロ市街地近辺の土地、不動産を結構持っています。バス会社も経営していて儲かっていたようです。しかし、それは、人々にはあまりわかりません。一方で市街地から20kmも離れた村の中に電気を通して「有刺鉄線」に囲まれた一区間だけ、毎夜灯りが煌々とともっていたとすると、それがカヴンという魔女たちが夜な夜な集まって開く集まりのような不気味さは持っていただろうということは想像はつきます。露出度も違って、オチョラはトロロに戻っても町の邸宅にいて、めったに村には戻りませんでした。奥さんが4人いたため、忙しく転々としていました。一方ACKは頻繁にアミンをトロロ

に招いて、派手なパーティを内輪だけで開いていたというキャラクターの違いもあります。もちろん務めていた大臣職も、かたやアミン政権の国防大臣と、かたや独立の希望が残っていたオボテ政権の地方行政大臣という対照的なイメージがあり、今まで指摘してきたようなコントラストは、そのまま呪詛されるエリートと祝福されるエリートと言い直しても差支えがないほどです。つけ加えますとこの地域では、プロテスタントとカトリックの対立もシリアスです。二人ともその対立の象徴になった側面もあります。

オチョラのチェンは理論的に現在も有効

いずれにしても、遺体が発見されていない以上、現在でもオチョラはティポのままだということについては議論の余地はありません。第二次オボテ政権のときに、棺の中に遺体の代用品としてバナナと茎と写真を入れて、埋葬儀礼を行いました。それは死霊を恐れてのことだと、妹さんは言っています。儀礼にはオボテ大統領も参列したそうです。だけれど遺体は見つかっていないし、正しい葬儀は行われていないので基本的にティポのままです。ですから、チェンをもたらず可能性があります。儀礼を行なったといっても、遺体を確認したわけでもなく、実際どこに埋められているのかはまだ判らないという状態ですから、儀礼を行なってもその儀礼がどこまで有効なのかも判らないのです。

しかもアドラのティポ概念を詳しく検討しますと、その本人に対する儀礼では浄化儀礼は完結しません。常に“骨かじり”という二つの集団の和解をもたらず儀礼とそれによるクウォル関係の解消というものを確認することで解決するわけです。ですから、葬式、イキロキ儀礼がされたからといって、このティポがチェンをもた

らさないということにはなりません。ACKの日記が現存していますが、それには、オチョラ失踪の日の日曜日、チャペルの定礎式の予定が書きこまれていました。アミンを招く予定だった日です。それが消されて別の日（12月31日）に行なわれています。どの程度ACKが逮捕を知っていたか今となってはよくわかりません。

いずれにせよオチョラのティポのチェンはいづれにせよ発動されてもおかしくないこの地域の人たちには考えられています。この一族は今でも呪われているというイメージがあるわけです。叔父には敬意を払うべきであるのに、オチョラの死はほとんど無視して、オフンビ家チャペルの定礎式を同じ年の12月31日に行なうことに集中していたことが、日記からも様子がわかります。こうしてみると、アイロニカルな状況がおわかりだと思います。チャペル建立などにACKが熱意を注げば注ぐほど、人々にはティポや呪詛に対する対抗呪術への情熱とみなされてしまいます。実際、式典でのACKのスピーチは全文残っていますが、スピーチでセム・K・オフンビの福音伝道者としての業績を称えて、いわゆる「福音」に言及すればするほど、それが塙の外側に住んでいる人々には、ティポに対する対抗呪術の「呪文」とも受け取られるわけです。また、このスピーチはすべてガバメンティ、つまり「Government Printer」から印刷されていることもある意味で象徴的です。

ACKの死とその後も続く噂

さて、話は戻りまして77年にACKは亡くなります。亡くなって何人かの人たちがその記憶を語っていますが、あるレヴランドの回想録をインタビューで得ています。「その日のことはよく覚えている。私とザカリア・オウォリそれ

からもう一人の大執事ともう一人の信徒と埋葬式の祈りを捧げたのだ。当時、アミン政権下では20人以上の集会は禁じられていて、しかもあの時は常に軍隊が屋敷の周りを取り囲んでいたの、人々は恐れて参列しようとしな。集まってよいかと知己の軍人を通して司令官に尋ね許可を得て、みんなで車に乗って参列してもいいのだということを宣伝して回った。」と回想しています。「有刺鉄線」の内側の人たちは悲しみに包まれていましたが、ACKの死は、外側では当然のことと受けとめられて、また歓迎もされました。それは今まで述べたオクムのティポ、セム・K・オファンビのチェン、近隣住民の呪詛、ロリ・クランの呪詛、オチオラのティポなどさまざまな伏線があったからです。死因の説明には事欠かず、場合によってはいく通りもの説明がなされる当然の帰結だったわけです。

実際にはアミン政権はまだ続くことになりませんので、人々の解放感はそのまま現実にはつながりません。だけれども、アミン政権の息苦しい雰囲気はACKの死とともに終わるかのように一瞬、思われました。それほどパドラでは、アミン政権とともにACKがありました。たとえば、次のような歌があります。近隣住民の遺族に対するなみなみならぬ悪意のこもった歌ですが、それは「有刺鉄線」の外側の苦悩を物語っていると同時に、内側の遺族の悲しみも非常に忠実に描き出しているように思います。たとえば「ルグバラが夫を殺してしまった、一番下の子はまだお腹の中だというのに」。これは事実です。ACKが殺されたときに一番下の女の子がまだお腹の中にいたのです。このことは、若干でも内部のことを知らない歌に歌い込めないわけです。今、便宜上、対立的に「有刺鉄

線」の内側と外側と描いていますが、排他的ではなく双方に行き来があるというものであるところが、もっと始末の悪いところ。邸宅に残っているアルバムには、アミンの写っている部分を引き裂いた跡が残っています。写真を引き裂いたのは誰かわかりませんが、双眼鏡を持っているアミンの写っていた部分を引き裂いた跡があります（写真8）。いっぽうでACKがケチだったということを批判するような歌は現在でも相変わらずつくられていて「おまえは全ての金が自分のものだとぬぼれているけれど、おまえが最初に土になった」などと歌われています。

実際、以後遺族はどうなったかと言いますと、息子さんはアメリカへ亡命して、航空関係の学校を卒業しました。しばらくボーイング機を操縦するパイロットとして勤めていました。アフロ・アメリカンの女性と結婚し、子どもも2人いましたが、離婚しました。96年に正式な後継者として帰国しました。ACKの奥さんはずっと国内の屋敷にいました。86年に現在の大統領が政権をとってムセベニ政権が成立したときに、当時の財産を認めてもらうように手紙を出して、認められました。息子さんが帰ってきてからは、ずいぶん気が楽になったようです。ACKの弟のお医者さんは、ウガンダを離れずにカンパラという首都で眼科のクリニックを開いています。彼は、屋敷にはあまり帰らずにウガンダ西部（ニヤマロゴはウガンダ東部です）にあるフォート・ポータルに農場を購入し、将来はそこに埋葬されるつもりです。

2013年の8月22日が、アミンの息子の一人（アミンには奥さんが7人いて、子どもは40何人いますので、そのうちの一人）が、ニヤマロゴを訪問しました。現地ではアミンがACKと“骨

かじり”に来たのだと評判になりました。そのときにチャペルの礎石を覆っていたタイルが剥がされました。ある意味では歴史的な事件でした。

このようにウガンダ現代史の有名な事件の犠牲者となったACKの家族もそれぞれが日常を取り戻してきているのは事実です。しかしながら「有刺鉄線」の外側では、すでに様々な因果関係の網の目というか因縁が流通していますので、こういう新しい情報もいちいち新しいチェンの結果だという解釈が成立しうるわけです。「有刺鉄線」の外側では、96年に帰国にした息子について次のように言っています。「彼はデンジャラスだ。ティポが彼をつねねらっているのだから。亡命もティポから逃れるためのものだったろうが、なぜ帰ってきたのだろう。結婚していないのは当然だ。もし、結婚して子どもでもできたら、大変なことになる。(私が結婚し、子どももできたが、うまくいかなかったらしいと告げると)それは、ティポのせいだ。」ということになってしまう。あるいは、弟さんがニャマロゴに現れないこととか、フォート・ポータルに農園を営んでいることなどについても、「彼は世代的に見てもティポのことがわかっていて逃げているのだ。彼はオクムの殺された地域には、絶対近づけないし、ACKの家があるニャマロゴにも近づかないのはそのためだ。西の方にいるのは、ティポから逃れるためなのだ。」と言っています。一度ある解釈のモデルが与えられてしまうと、それに沿って新しい出来事が解釈されおすような典型になっています。

アフリカ妖術研究の現状から

さて、こういったアフリカの「ウィッチクラフト」「妖術」とか「邪術」といわれることに

ついて、一般にどのような議論がなされているか。まずは「妖術のレジリアンス」としての論点があります。近代化してもアフリカは妖術がはびこる、いやむしろ近代化こそが妖術が先鋭化する温床だ、という論点です。現代の一般的には尊敬を集めているような政治家たちもウィッチクラフトと現実に関係し続けているのだということ、たとえばバヤールが非常に明快に書いています (Bayar 1993)。

また、カメルーンで調査したフィッシーとゲシーレは次のようなことを報告しています。「カメルーンのこの地域には、よく言われていることがあった。それは、きれいな近代的な家の前には、恐れも知らずに地元の家を建てたエリートとエリートたちの終の棲家となった墓石が並んでいるのだ。彼らはすぐにその成功を妬んだ親族に殺されてしまったのだ。」(Fisiy & Geschiere 2001)。これは近代化によって登場するコロニアル／ポストコロニアル・エリートが、妖術のターゲットになることを指摘しているのです。

あるいは、妖術とか邪術といったウィッチクラフトは近代を飼いならすものであるとか、近代化への抵抗である、という「抵抗論」や、妖術は近代との関係でとらえられて「妖術のモダニティ論」などとして、こういった分野の研究者のなかでは有名になっています。ただ、紹介した事例をみていきましても、こうした近代化と妖術の関係は、それほど主体的あるいは意識的な事態だろうかという疑問を私は持っています。伝統と近代を別のもののように排他的に描き出すのは、果たして妥当だろうかということ、もう一つは、エリートを一枚岩のように考えることは、単なる階級論にならないだろうかということ、ということ。

さらに言いますと、ACKも（たぶん私たちも）完全に近代を体現しているわけではないし、そもそも我々も近代の総体とかを一気に認識するようにはできていないわけです。今日取り上げた例でいえば、ACKが建てたチャペルには、一方でキリスト教徒だという自己認識はあるけれども、その一部は、慰霊であるとか、名誉回復だとか、非常にパーソナルなあるいは伝統的な願望があるわけです。それは果たして本来のキリスト教的チャペルなのかどうか。しかも彼自身が供養の様子、つまりニャパドラの伝統的な習慣を残しながら、チャペルの建造儀礼も伝統的な行事もセットで、現地の人たちを招いて儀礼も行う様子が写真やフィルム映像で残っています。そういった習合状態を示す代表的なものが、イキロキで、現地の一般的な葬式では必ず、伝統的なものが終わってから、教会に引き渡す形で行われます。

さて、もうひとつ考慮に入れるべき事柄として、エリートではあっても神秘的な噂を身にまとうことがない例があります。少ないけれども国際的な舞台でも、中央政府でも表舞台で一時期華々しく活躍しながら、ごく普通にリタイヤして農民に戻る例もあるというようなことを考えますと、エリートにも個性があり、エリート・イコール・神秘的なターゲットになったり、あるいは神秘的なものを利用することにはならないだろうと思います。

このようにACKの死因に対する現地での説明をみてきました。現地では、キリスト教自体も外来のウィッチクラフトのように認識していたようですし、「有刺鉄線」の内側の熱心な福音伝道は、外側の人々にはティポへの対抗呪術に見えた。セム・K・オフンビに端を発するティポの物語とキリスト教受容の課程で、ACK

一家の人々がどうしても行うことを回避してきたアドラ流の儀礼の措置つまり“骨かじり”をしないということも、ティポや呪詛の噂を強化する方向へいったわけです。しかも、「有刺鉄線」で一時期から地所を取り囲むように設置したものは、外部との直接交渉を切断了しました。そのことによって、外部の人々は想像力をよりたくましくしましたし、一度流通しはじめたティポや呪詛の噂とその解釈をエスカレートする方向へ向かいました。彼らはACKと相互交渉することはほとんどありませんでした。直接の接触契機が少ないところに補正する機会はありませんでした。ただ砂埃を巻き上げていく車をながめながら、そのイメージを外部で作り上げていきました。彼らが入手できる情報とか目にするものすべてウィッチのそれとみなされていきました。彼らはACKの車の型番を非常によく記憶しています。「最初は黒いBSAというバイクに乗っていたけれど、後にグルに職を得たときにプジョー403に乗り換えた。その後メルセデス・ベンツ190、ベンツ250、ベンツ280SEと、次第に高級車に乗り換えた」。別に車マニアでもない住民が実によく記憶しています。

彼らが見ていたのは、ACKの持っている車であるとか、中に建った教会であるとかのマテリアルであって、直接ACKはどのような人だったのかということ具体的な接触で知っている人はほとんどいないということです。

さて、災いが起こった時に災いをどう解釈するかという論理の筋道である「災因論」、あるいは「物語」の筋といった分析概念を手がかりにウィッチクラフト、あるいは妖術・邪術信仰といわれてきた分野で考察がすすめられてきました。

本日のお話しの前提としては、アミン大統領

が暴君で、気に入らない人をいっぱい殺したという歴史的事実にもとづいて、ACKはその犠牲になったひとりなのだ、という一般的な「物語」の「筋」があります。その「筋」でACKの出身地以外では、十分みんな納得するのですが、現地の人はそれに満足しない、という実態は示せたと思います。アドラの人々にとって、ACKの死を考えたときに、「前景化」するのは父の時代から続いているティボ、死霊の噂であり、ACK自身の事績にまつわるティボや呪詛の噂でした。それがしばしばキリスト教受容と連動した側面も持っていたわけです。

次の課題は、どういう場合にこの「前景化」や「後景化」が起こるのだろうか、ということです。複数の因果関係の可能性があって、その一つが「前景化」されたり、他のいくつか「後景化」されるというプロセスがあるということまではいってよさそうですね、それがいったいどのような形で果たされているのか、そのメカニズムを解明していくことが今後の課題であろうと思います。

今日の話はこれで終わります。ご静聴ありがとうございました。

参考文献

Bayart, Jean-François,

1993 *The State in Africa: The Politics of the Belly*. London: Longman.

Fisiy, F. and Peter Geschiere

2001 Witchcraft, Development and Paranoia in Cameroon: Interactions between Popular, Academic and State Discourse. In *Magical Interpretation, Material Realities: Modernity, Witchcraft and the*

Occult in Postcolonial Africa. Moor, H. and Todd Sanders (eds.), London: Routledge.

Kyemba, Henry

1977 *A State of Blood: Inside Story of Idi Amin*. Kampala: Fountain Publishers.

Onen, P.M.O.

2000 *The Diary of an Obedient Servant during Misrule*. Kampala: JANyeko Publishing Centre Ltd.



写真1 ACKとアミン、蜜月時代



写真2 セム・K・オフンビの墓



写真3 セム・K・オフンビ、左はACK



写真4 父の肖像をステンドグラスに



写真5 儀礼に動員される軍人



写真6 アミンを載せたヘリが邸宅の庭に着陸



写真7 アミンと談笑するACK



写真8 アミンの写った部分を引き裂いた跡が

*本講演録所収の写真の公開については、オフンビ家の理解と協力を得ています。許可なく複製はご遠慮ください。